

Title	メタフュシカ 第43号 彙報
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2012, 43, p. 139-143
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/26500">https://hdl.handle.net/11094/26500</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 【彙報】

### ○ 哲学哲学史・現代思想文化学

現在、哲学・思想文化学には、学部生が37名在籍しています。大学院哲学哲学史博士前期課程には7名、同後期課程には10名が、大学院現代思想文化学博士前期課程には8名、同後期課程には4名が在籍しています。上野修教授、入江幸男教授、舟場保之准教授、および須藤訓任教授、望月太郎教授、中村征樹准教授、入谷秀一助教の各教員が、臨床哲学所属の教員と連携しつつ、学生の教育・研究指導にあたっています。

本年度の講義・演習は、「ラカンを読む」「ライプニッツとスピノザ様相の観点から」「スピノザ『エチカ』を読むⅪ,Ⅻ」「ドゥルーズの『差異と反復』を読む」「意味・真理・主体」(以上、上野教授)、「Discussing Horwich's *Truth* (1), (2)」「問答の観点からの哲学的意味論・真理論」(以上、入江教授)、「カント『実践理性批判』を読むⅢ,Ⅳ」「カントの平和論をめぐる諸問題」「ドイツ哲学基本文献講読Ⅰ,Ⅱ」「J.ハーバーマスの思想Ⅵ」(以上、舟場准教授)、「ハイデガーの思想(1), (2)」「ショーペンハウアーとニーチェ(1), (2)」「現代哲学史概説」(以上、須藤教授)、「オルターグローバルイゼーションの思想」「環境思想の諸問題」(以上、望月教授)、「大学と学問」「科学技術社会論研究Ⅰ,Ⅱ」「科学技術社会論の最前線」「ポスト東日本大震災の科学技術と社会」(以上、中村准教授)、「Writing Humanities Papers in EnglishⅠ,Ⅱ」(望月教授・中村准教授)、「テオドール・W・アドルノの『ミニマ・モラリア』を読む」(入谷助教)という題目で行われています。また、その他に、修士論文・博士論文作成のための演習が定期的に行われ、活発な研究・討論が行われています。

また非常勤講師としては、樽井正義氏(慶應義塾大学)に「カントの社会哲学」、Michel DALISSIER氏(同志社大学)に「Bergson et Nishida (ベルクソンと西田)」、平川秀幸氏(大阪大学)に「科学技術と現代資本主義」、重田謙氏(大阪大学)に「論理学初級(1), (2)」という題目で講義していただいています。

HP (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/philosophy>) ならびに You Tube にウェブ局「ビデオ・メタフィシカ」を開設し、研究室の活動状況などを公開しています。また海外に研究成果を発信するために、欧文機関紙 *Philosophia OSAKA* を刊行しています。

哲学哲学史・現代思想文化学の研究会として、handai metaphysica を開催しています。特別講演会として2012年2月2日には品川哲彦教授(関西大学)に「ケアと正義」という題目で、同年6月12日には DR. RACHEL ALBECK-GIDORN (Bar-Ilan University) に“The Influence of Spinoza's Thought on the Modern Jewish Culture”という題目で、同年8月10日には樽井正義教授(慶應義塾大学)に「カントにおける普遍性」という題目で講演していただきました。いずれにおいても活発な質疑応答がなされました。

研究例会としては、2012年3月6日に藤野幸彦院生(博士後期課程)に「ミカエル・デラ・ロッカ、『スピノザにおける表象と心身問題』」、谷山弘太院生(博士後期課程)に「ラース・ニーハウス、『問題としての道徳』」、中村征樹准教授に「研究不正への対応を超えて：「リサーチ・インテグリティ」というアプローチとその含意」、多田雅彦院生(博士後期課程)に「反復者、反復そのもの、反復されるもの——ドゥルーズ『差異と反復』における反復の哲学の統一性について——」、原田淳平院生(博士後期課程)に「真理の理論は Truthmaker 理論にどんな影響を与

えるのか」、という題目で発表していただきました。いずれにおいても活発な質疑応答がなされました。

第六回哲学ワークショップ（テーマ「討議」・「フィヒテと意味の全体論」）が2012年2月11日に、第七回哲学ワークショップ（テーマ「＜善＞／＜悪＞概念の解体と再構築の諸相—スピノザの場合／ニーチェの場合—」・「命法なき規範はいかにして可能か」・「超訳系哲学とは何か」）が同年7月7日に、それぞれ開催されました。

新入生歓迎イベント「フィロソフィカル・フィッシュボール」が2012年4月19日に、「世界哲学の日記念セミナー」（須藤訓任著『ニーチェの歴史思想——物語・発生史・系譜学——』を読む）が同年11月17日に、それぞれ開催されました。

上野教授が主宰されている「近現代哲学の虚軸としてのスピノザ」（科研基盤研究（B））の特別講演会が2011年10月8日（大阪大学）、同月10日（東京大学）、2012年2月29日（東京大学）、同年3月10日（大阪大学）、同年11月4日（同大学）に、研究会「17世紀とスピノザの傷痕」が2011年11月27日（東京大学）、「現代思想のトラウマとしてのスピノザ」が2012年5月19・20日（大阪大学）、「カントにおけるスピノザ問題」が同年11月24日（同大学）、そして総括シンポジウム「近現代哲学の虚軸としてのスピノザ」が同月25日（同大学）に、それぞれ開催されました。

上野教授が月刊雑誌『本』（講談社）にされていた「様相の十七世紀—哲学史のワンダーランド」は2012年7月で連載を終了しました。単行本化が予定されています。また同教授の共著『西洋哲学史3「ポスト・モダン」のまえに』（講談社メチエ）が同年6月に刊行されました（「ホップズとスピノザ」の章を担当）。

入江教授がアメリカ哲学会太平洋部会大会（シアトル、2012年4月6日）にて‘Philosophy in Japan after WWII’という題目で、また国際会議「カント、フィヒテとドイツ観念論の遺産」（ネブラスカ大学、同月9日）にて‘Semantic Holism and Fichte’s Wissenschaftslehre’という題目で発表を行いました。

望月教授が International Symposium on “Philosophical Practices in Peace-Building and Sustainable Development” (17 March 2012, Pannasastra University of Cambodia, Phnom Penh, Cambodia) で、The role of Philosophical Practice in Disaster Recovery という題目で、口頭発表を行いました。

舟場准教授が寄稿されている著書『カントを学ぶ人のために』（有福孝岳、牧野英二編、世界思想社）が2012年5月に刊行されました（コラム①「批判の可能性を考える」を掲載）。

舟場准教授がルツツ＝バッハマン教授60歳記念会議“Das Wissen des Klugen: phronesis, prudentia und moralisches Handeln in Mittelalter und Neuzeit” (2012年3月28日～31日、Villa Vigoni-Gespräch in den Geistes- und Sozialwissenschaften, Deutsch-Italienisches Zentrum, ITALY) にて、“Gilt dieser oder jener Satz zwar in thesi, aber nicht in hypothesi? Klugheit bei Kant” という題目で、6. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium (同年8月24日、Europazentrum der Waseda-Universität, Bonn, GERMANY) にて、“Humanitäre Intervention und Menschenrechte” という題目で、発表を行いました。

入谷助教と重田謙氏（大阪大学非常勤講師）が共著者となっている『生命と倫理の原理論——バイオサイエンスの時代における人間の未来——』（大阪大学出版会）が2012年3月に刊行されました。

嘉目道人院生の論考「事行としての自己関係性 —フィヒテ知識学の言語哲学的変換に向けて—」が『フィヒテ研究』（第19号、2011年）に掲載されました。

嘉目道人院生が関西倫理学会（2011年10月30日、関西大学）にて「討議倫理とフィヒテの道徳論—道徳原理の根拠付けについて—」という題目で、さらに日本哲学会第71回大会（2012年5月12日、大阪大学）にて「『究極的根拠付け』か『生活世界の人倫性』か—討議倫理をめぐるアーペルとハーバーマスの論争—」という題目で、11th Biennial Meeting of North American Fichte Society（同月19日、ラヴァル大学、カナダ）にて“What is the Unlimited Communication Community? Transcendental Pragmatics as Contemporary Fichteanism”という題目で、また須賀佳苗院生が第七十五回上智哲学会大会（2011年10月30日、上智大学）にて「カントの占有論における「生得の権利」の位置付けと意義」という題目で、さらに近代倫理学研究会（2012年7月28日、早稲田大学）にて「『人倫の形而上学』「法論」における法の法則と生得的権利について」という題目で、また原田淳平院生が日本哲学会第七十回大会（2011年5月14日、東京大学）にて「真理論のフロンティア—真理の多元主義の可能性—」という題目で、さらに応用哲学会第四回大会（2012年4月21日、千葉大学）にて「真理概念はデフレ化することができるのか」という題目で、また田中悠介院生が日仏哲学会春季大会（同年3月31日、京都大学）にて「ベルクソンにおける経験的事実としての「開かれたもの」の意義」という題目で、また谷山弘太院生がショーペンハウアー協会第17回ニーチェセミナー（同年5月3日、八王子セミナーハウス）にて「歴史的批判と必然性の認識—『人間的、あまりに人間的』より—」という題目で、また山本哲哉院生が2012年哲学若手研究者フォーラム・萌芽研究セッション（同年7月22日、国立オリンピック記念青少年総合センター）にて「生成と存在、あるいは物語としての歴史と出来事としての歴史」という題目で、それぞれ発表を行いました。

（入谷）

## ○ 臨床哲学

本年度の当研究室の在籍者は、学部生が26名、大学院生が27名（前期課程16名、後期課程11名）である。中岡成文教授、浜渦辰二教授、本間直樹准教授（兼任）、大北全俊助教の各教員スタッフが、哲学哲学史・現代思想文化学の教員と連携しつつ、教育・研究活動に従事している。

本年度は非常勤講師として、久保田徹特任准教授（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）に本間直樹准教授と共同で「思考の活動とメディア」を担当していただいた。

2012年3月に研究室の雑誌『臨床哲学』13号を昨年度と同様にweb上で刊行した。また本年度より年2回の発行とし、2012年10月に同14-1号を刊行した。13号は論文3編、翻訳1編（解題つき）、研究ノート2編を、14-1号は論文3編と中岡成文著『試練と成熟—自己変容の哲学—』合評会の記録を掲載した。また『臨床哲学のメチエ』を学部生と院生の共同編集のもと18号と19号を発刊した。19号はダリル R. J. メイサーの『ゲームで学ぶ倫理・道徳—生命倫理学ユネスコチャイアプログラム2008』の翻訳を掲載した。

昨年度に引き続き本年度も臨床哲学研究会を季節ごとに定期的で開催した。昨年度の開催について、まず2011年10月8日に「第26回臨床哲学研究会」を開催した。准教授の本間直樹と博士前期課程在籍の辻明典が共同で「南相馬と臨床哲学」、そして博士後期課程在籍の東暁雄が「手続的正義と規範としての法」、同じく博士後期課程在籍の森本誠一が「市民参加型社会へ向けた公衆関与のあり方について—英国ビーコンズ・プロジェクトの取り組みを手がかりに」を発表した。そして、2012年1月14日に「第27回臨床哲学研究会」を〈「ケアの臨床哲学」研究会〉

者のウェルリビングを考える会) <<ケア>>を考える会) と共催で、シンポジウム「高齢社会におけるケアを考える」として開催した。シンポジストとして本研究室教授の浜渦辰二 (<<ケアの臨床哲学>>研究会) 代表)、藤本啓子 (<<患者のウェルリビングを考える会>>代表)、林道也 (<<ケア>>を考える会) 代表) が話をし、質疑応答を行った。本年度に入り、2012年4月8日に「第28回臨床哲学研究会」を開催した。博士後期課程在籍の正置友子が「子どもたちと絵本の扉をひらく」、栗田隆子 (ライター) が「怒りと呪いの共同体—女の貧困を考える」、西川勝 (大阪大学特任教授) が「貝原益軒『養生訓』から考える」を発表した。そして、2012年7月8日に「第29回臨床哲学研究会」を開催した。個人発表として紀平知樹 (兵庫医療大学准教授) が「待機する社会としての定常型社会」を発表、その後、本研究室教授の中岡成文が刊行した『試練と成熟—自己変容の哲学—』の合評会を評者に村上靖彦 (大阪大学准教授)、田中俊英 (NPO 法人淡路ブラッツ代表)、文元基宝 (博士前期課程在籍) を招いて行った。直近では2012年10月21日に「第30回臨床哲学研究会」を開催した。博士後期課程在籍の徐静文が「中国におけるターミナルケアの歴史と現在」を発表、そして山崎竜二 ((株) 国際電気通信基礎技術研究所研究員) を招いてシンポジウム「遠隔型ロボットを介したコミュニケーションの可能性——石川県宮竹小学校の授業を通して考える」を開催した。本年度は、2013年1月20日に開催を予定している。

中岡成文教授が、2012年4月10日に大阪大学出版会より『試練と成熟—自己変容の哲学—』を出版した。また2011年11月17日に第43回大阪大学二一世紀懐徳堂講座「ここから拓く未来」で「復興する」ために——臨床哲学から」という題で講演を行った。2012年6月22日には、台湾の中央研究院で開催された「第4回漢学国際会議」“The 4th International Conference on Sinology”において、英語講演「自己のテクノロジーと臨床哲学」(Self Technology and Clinical Philosophy) を行った。

浜渦辰二教授は、自身が代表をしている「ケアの臨床哲学」研究会の主催するシンポジウムを2012年1月14日 (シンポジウム「高齢社会におけるケアを考える」、「第27回臨床哲学研究会」として共同開催) と2012年5月5日 (シンポジウム「高齢社会のなかで北欧ケアを考える」) に、いずれも大阪大学中之島センターで、また2012年7月7日に上野千鶴子講演会「おひとりさまの最期」を大阪大学会館講堂にて開催した。そして、これまでの活動の記録を『ケアの臨床哲学—シンポジウムの記録』として2012年3月30日に発行した。また、2012年2月19日には「高齢者ケアフォーラム：老いること、生きること、食べること」(キャンパスプラザ京都) にてシンポジウムに参加し、2012年3月25日には「リビングウィル勉強会：脳死と臓器移植」(神戸国際会議場) にて講師をつとめた。ISAP プログラムによるドイツ・ハイデルベルク大学との講師交換協定により、2012年7月下旬に2週間ハイデルベルクに滞在し、同大学哲学研究所における講演「Watsujis „Ethik“ als Anthropologie – Zur Rezeption deutscher Philosophie in Japan」、翻訳・通訳研究所における講演「現代日本における死をめぐる状況」、日本学研究所における講演「Watsujis Übersetzung der deutschen philosophischen Vokabeln」、ライン・ネッカー友の会における特別講義「現代日本社会における“生老病死”」を行なった。

本間直樹准教授が総合コーディネータをつとめている「中之島哲学コレージュ」も、毎月セミナーと哲学カフェを定期的に「アートエリアB1」にて開催している。また、2012年7月16日に韓国で開催された第十一回哲学プラクティス国際会議にて「哲学プラクティスのコミュニティ・アプローチ」を発表した。

大北全俊助教が、2011年12月13日に、大阪大学最先端ときめき推進事業「バイオサイエン

スの時代における人間の未来」第26回ときめき☆セミナーで「HIV感染症対策とバイオポリティーク」を発表した。2012年3月21日に、「合意形成科研第二回研究会」（科研課題名：不確実性に対する合意形成に関する応用倫理的考察）にて「日本の国民健康づくり運動に関する思想について『健康日本21』を中心に」を発表した。

本年度の開講授業は以下の通り。「倫理学の研究方法A・B」（浜渦、中岡、本間、大北）、「臨床哲学ネットワーク12前・後」（中岡、浜渦、大北）、「臨床哲学研究A・B」（浜渦、中岡、本間）、「臨床哲学概論12」（中岡、大北）、「自己変容の哲学12前・後」「Ethics in English 2012」「ヘーゲル哲学を読みぬく12」（以上、中岡）、「ケアの臨床哲学—人間の死とそのケア—」、「フッサール間主観性の現象学のゆくえ」、「ケアの臨床哲学—人間の死とそのケアを考える—」、「フッサール間主観性の現象学のゆくえ（外国語文献演習）」（以上、浜渦）、「思考の活動とメディア（8）・（9）」（本間、久保田）、「フランス語関連文献講読演習（1）・（2）」、「哲学的コミュニケーションの探究と実践（3）・（4）」（以上、本間）。

（大北）